



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

佐藤光一氏講演

震災に遭遇して

(2012年11月に開催されたI-OWA マンスリー・セミナーにおける講演の抄訳です)

福島県南相馬市でネクストライフ・コンサルティングの代表を務められる佐藤光一さん(人呼んで、「ピカイチ先生」)は2011年3月11日の東日本大震災とその後の原発事故で大変なご苦勞をされました。被災後の生活、避難生活、子育て家族の苦悩、そしてどんな準備が必要なのか、生々しいお話を伺いました。

南相馬に住んでいて被災しました。震災の前は、もしものときに生き残るために、あれこれ一生懸命考えて実行していました。しかし今は「生き残った」のではなく、「生かされている」者として何をすべきか、というふうに考えるようになりました。確かに自分たちは被害者ですが、現役世代としての私は、次世代としての子どもたちに対して加害者です。そういう立場で次世代の人たちに何を残すか、何ができるかを考えています。子供たちに恥じない後姿を見せる、これだけは心がけて努めています。

自宅は、事故のあった第一原発から20キロ以上30キロ以内の「緊急時避難準備区域」にあり、原則は住んでいてもよいけれど、原発で緊急事態が発生した時には自力で安全な場所に避難するという条件付きでした。ということは子どもや病人は「いちゃダメ」ということになりますから、子育て家族にとっては強制避難と同じです。しかし、なかなか周りにはその事情を理解してもらえないという問題がありました。また避難したほとんどの子育て世帯では、父親の勤め先が事業を継続していたために、家族が分断されるということも起こりました。

避難の判断は、自分でしなければなりません。テレビでは、「×××が起きてるみたいですが、大丈夫です」が繰り返されるばかりで事実がどうなのかという情報は何も入って来ない。放射能が飛んできているのかどうか見るために、1時間おきに窓の外の本がどちらに揺れているか見ていました。避難しようと決めた時、高校生と中学生の子供たちには、「今、原発はとても大変なことになっているのかもしれない。実は全ての人を助けられなくて、自分たちは見捨てられたのかもしれない。これが現実だ」と話し、「もしもの場合は自分で考え、一人で逃げろ。パパもママも精一





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

杯逃げるから」と念を押しました。そのくらい切羽詰まっていたんです。

実際の避難生活は、東京で2週間過ごした後、新潟県上越市にお世話になりました。新潟は中越地震を経験していますから、困っていることが先に分かっていて、どんどん進めてくれました。子どもの学校の準備など、とても恩義を感じています。「仮設住宅」も、一週間ちょっとで何百世帯という空き部屋を用意してくれたのです。一生懸命やって下さったと思います。

講演ではこのほか、地震に対しては事前の備えが全てだ、津波などの異常事態下では正常時のルールは意味が無い、など被災経験からの教訓や、避難生活の実態について、詳細にお話しただきました。その後のフリーディスカッションでも、南相馬に戻ってからの生活についてなどのお話が続きました。

ミニ対談

佐藤光一氏、島田知保氏、岡本和久

岡本 佐藤さんのお話は貴重な体験談ですが、決して、我々にとって遠い出来事の話と捉えてはいけないことですよね。本当にご苦労されたのだなと思います。その中でおカネのことについていうと、預貯金よりは、とにかく現金。その場をしのげる為には現金が100万くらいあれば一番安心ということでしょうか。



佐藤 うちの場合は現実的には、3か月分を現金で持っていました。もともと6か月分は生活応援資金と決めて現預金にしていました。3か月分は預貯金、3か月分は現金を家に用意しておいたので、その時は現金を掴んで逃げました。

岡本 でも、現金を持っていないご家庭はどうしたのでしょうか。

佐藤 ひとつは郵便局が一律10万円、通帳がなくても出してくれました。

岡本 それは、口座から出してくれたのですか？



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

佐藤 いや、口座というわけではないですね。津波の人は通帳も印鑑も失くしていますから、住所と名前を書いてくれればということを出してくれました。そうしないと生きていけませんからね。

岡本 それは、民間のメガバンクとかでもあったのですかね。

佐藤 それは聞いていないですね。やはり郵貯だからできたのでしょうかね。実際に郵貯に勤めている人に「全部戻ってきた？」と聞いたところ「いや、半分くらい」と言っていました。でも律儀に、「家族が他の郵便局で貰ったから」といって、返しに来た人もいたそうです。

岡本 現金で持つということの必要性というのは、本当に新しい視点ですね。ポートフォリオとは別にして、緊急用に持って逃げる為の現金は、掴みやすいところに置いておくことでしょうか。

島田 でも今の若い方達は、ほとんどカードで支払い現金を持ち歩かないですよ。

佐藤 そうすると、着る物も途中で買えない状況になりますよね。

岡本 いろいろ現政権(当時、民主党)の良い点、悪い点があったと思いますが、こういう誰も経験をしたことのない状況の中で、全体的に国の評価はあまり良くないというのが一般的ですが、そのあたりはどうでしょうか？

佐藤 現在も全然進んでいませんね。でもこれはしょうがないと思っています。よく言われるのが「幸せな家庭はだいたい似かよっているけど、不幸な家庭はみんなそれぞれ違う」と。実は今それが、現場で起きています。ただ行政では一つネックがあって、補助金だろうが援助だろうが、公平感のもとで行われます。だから当然のことながら痒いところに手が届かないわけですよ。

島田 それはそうかもしれませんね。

佐藤 私は今、ハローワークで再就職支援のお手伝いをしていますが、南相馬市の求人倍率をご存じですか。実に 1.68 倍なのです。100 人の方が職を求めているのに対して、企業側は 168 人求人を出している状態です。経営者の方達にお話を聞くと、人が来ないので事業を戻せないそうです。今、市の人口の35%が減っています。内訳として、25%が市外に避難され、10%が既に転居届を出されたか津波で亡くなられています。私の娘が今年から高校に入学しましたが、例年の定員の半分しかいませんでした。それから見ても、子供とその親世代の半分が戻ってきていないのでしょうかね。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本 戻ってこないというのは、やはり原発のリスクが大きいからですか。

佐藤 そうです。だから人口構成がすごくいびつになっています。スーパーへ行ったら高齢者ばかりです。仮設住宅の入居者もほとんど年配の方達ばかり。三世帯家族なんかは、おじいちゃんおばあちゃんだけ残って、子どもと孫は避難です。企業さんも事業をやろうと求人を出しても来ないですよ。また、原発関係の除染作業がいいお給料をだしているので、企業さんがそれに見劣りしないだけの金額を出せず、結局、求人を出すのをやめてしまう場合もあります。行政の仕事をされる方々も家庭人としては民間人と同じですよ。単身赴任で一生懸命復興に頑張ってくれましたが、小さな子がいる家族は避難したまま移住してしまい、かなりの方が一年たって辞めています。でも仕事はずっと増えている状態です。街のなかの除染作業も手付かずの状態です。行政も人がいないし、街も老人ばかりだからやる人がいない。各個人の家庭も企業さんも行政さんも人が足りない。だから動けないというのが現状です。

佐藤 うちの子供は、テレビのニュースはテレビ局の意見であって、本当のことを伝えないと言っています。例えばある人が「死の街」と言ったということが報道され散々、非難されていましてよね。でも我々震災した者にとって、死は隣り合わせなのです。仲間内の死なのです。息子の通う高校は、東京ドームが6個か7個入る大きな校庭の為、自衛隊の前線基地になりました。そして、体育館は遺体の安置所になりました。しかし、今もそのままその体育館を使っています。掃除して使う時に校長先生がこう言いました。「自衛隊の方が亡くなられた方を一人一人お連れして、プールの中できれいな姿にしてくださって、この体育館に運んできました。ここの体育館から我々仲間が最後のお見送りをしたのです。だから、ここはみなさんの家の居間と同じです。決して汚れていません。このまま使います」と。子供達は死というものに対して当たり前のように接しています。決して、死というものが汚いという感覚はありません。テレビ局側の持つ死の定義とは全然違いますよ。南相馬のその厳しい現実を経験してきた子供達は、逞しいかもしれませんよ。将来が楽しみです。

岡本 インベストラ이프で今年の8月、9月と2か月にわたり、戦中、戦後の引揚者の方々のインタビューをしました。あの体験をした人達は、常に死と隣り合わせでした。赤ん坊を連れて帰れないということで、満州から引き揚げる時に橋の上から子供を投げ捨て、その音が「ぼちゃーん、ぼちゃーん」とずっと聞こえたというコメントがありました。また、子供が飢え死にしてしまったので、せめて、公園の一角にある友達のお墓の隣に埋めてあげた。翌日、お参りに行くと、トラクターで既に整地され「日本人と犬入るべからず」という看板があったとか。そういう極限的な状態で過ごされたお話をたくさん伺いました。そのような状況を通ってきた方たちはものすごく強いですよ。少々なことではへこたれない。80歳90歳超えても未だに元気ですね。しかし、その後、日本は幸せなことに戦争は無く、我々は死と直面することは少なかった。無菌状態的な子供たちがいっぱい出てきた中で、このような震災が起きたわけです。そういう意味では、東北地区から将来を担うようなすごい人たちが出てくるのではないかと思いますね。普通では体験できないようなことを乗り越えていますから、相当鍛えられていますよ。彼らが日本を変えていくことに期待したいです。それが最大



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

の、転んでもただでは起きないリターンではないかと思えますね。

佐藤 私は 3.11 を経験したことによって、生かされていると感じるようになりました。自分のことよりも周りのこと。周りがある自分が生かされている。そういう風に考えた時に、死に対する恐怖が薄れました。生かされているということは、自分ではどうにもできないわけですから、自分でできることをやっていけばいいわけです。得体の知れない死への恐怖感がとれたことで、前向きに生きるということにすごく力強くなっていきます。

島田 それは岡本さんが病気になって感じたお話とも、通じるものがありますよね。

岡本 私のような小さな経験であっても、死の恐怖感がすごく変わりました。死はいつ来るのかはわからない。でも、今は生きているわけだから、今この時点でどれだけ価値のあることをしていけるか、そこに集中すればいいと心の底から思えるようになりました。そういう意味では、ありがたい体験だったわけです。

佐藤 そういう意味では、将来というよりも今何ができるか、今やっておきたいことに全力を尽くしておきたい、ということですね。そして、今それをやれることへの喜びを感じます。過去にはこれだけの財産があったのに、あれもこれも無くなっちゃったというマイナスの発想は全然ないです。全部失ってみれば後は何ができるかというプラスの発想しかないですね。

岡本 悟ったわけですね。

島田 戦争が終わった後の日本を支えたスピリットはそれじゃないかと聞いていて感じますよね。何も無くなっちゃった後で、先に進むしかないというエネルギー。

岡本 ただ今は、何も無い状態ではなさすぎますよね。何でもあるから逆に失うものが怖いわけですね。その意味で被災された方はいうまでもありませんが、直接、被災することのなかった人たちにも大きな教訓を与えてくれた事件だったと思います。そこからいかに日本全体がポジティブなエネルギーを生み出すか、それが被災された方々へのせめてものはなむけだろうと思いますね。今日は貴重なお話をありがとうございました。